

ジェフリー・エプステーンと科学者たちの沈黙

【訳者注】わが国のすべての科学者は、一般の人々とともにこれを読んで、あのペドフィリア極悪犯にして権力者のジェフリー・エプステーンが、科学界（特にダーウィン進化論共同体）と、どのように親密につながっていたかを、自分で確かめていただきたい。訳者（私）は十数年前から、ダーウィニズムの ID に対する異常な敵意から、このような邪悪な背景を予想はしていたが、エプステーンの獄中殺しという事件があった後、このような驚くべき深層の暴露が、科学者を通じてなされるとは予想しなかった。

公共の立場で、ダーウィン進化論を必死に弁護しようとする人々に言う。これを命令する者たちに逆らうのは確かに恐ろしいであろうが、とにかく、ダーウィン進化論は泥にまみれ、どの方向から見ても完全に腐っていることがわかった。間違いなくそれは、わが国を滅ぼす最大の要因になり得る。どうかそれを考えて行動していただきたい。エプステーンについては、ここを参照：

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/190815.pdf>

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/190817.pdf>

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/190829.pdf>

Michael Egor, EvolutionNews

September 24, 2019



文科系の学者は、テキストの解釈について、ある格言をもっている。それは、あるテキストの中で本当に重要なことは、言われていることより、しばしば言われていないことの方にある、ということだ。ストーリーを本当に理解するためには、行間を読まねばならない。

その中にあるべきもので、何が省かれているか？ その省略の動機は何か？ これはしばしば、深い目的と課題があって、それがページ上の明らかな言葉では、隠されていることを示している。それはシャーロック・ホームズの、吠えなかった犬に喩えられる。沈黙がしばしば、物語の中では本当の意味を担っている。

ペドファイル犯であるジェフリー・エプスティーンに関わる、科学の世界のスキャンダルは、恐るべきものだ。しかし、我々にとって肝心のことは、エプスティーンと科学界のエリート間の協力の、本当の意味を理解することである。そのエプスティーンと、主導的ダーウィニスト並びにコンピューター科学者の盟友関係における、最も重要な意味は、この男と彼のエリート科学者友達の墮落ではない。その最も重要な意味は、この残忍な事件の真ただ中で、科学者共同体が沈黙していることである。私の考えでは、我々の心胆を骨の髄まで寒からしめるのは、我々の科学文化について、特に「科学のコンセンサス」と言われるものへの信頼のあり方に、明らかに疑問が生じてきたことである。最も多くを明らかにしたのは、エプスティーン物語において起こったことよりも、起こらなかったことである。

起こらなかったこと

起こらなかったことはこういうことだ：——**科学者業界において、明らかに子供をセックスのために取引している、ペドファイル有罪犯を指導し、料金を取ることに對して、何の反対意見もなかった。**一言も…。この嫌悪すべき物語のすべての段階において——エプスティーンの20年前の、科学援助への初期の手出しから、2008年の子ども買春に対する有罪判決を経て、MIT、ハーヴァード、サンタフェ研究所、超人間主義計画「ヒューマニスト・プラス」における、10年間の多くの、エリート・ダーウィニストやコンピューター科学者への、パトロンとしての助成金献上の期間を通じて——科学者共同体から聞こえてきたのは、恥ずべき沈黙であった。

何千という、エリートや地位のない科学者たちが、エプスティーンの博愛主義や友情の恩恵に浴していた。更に何千という科学者が、エプスティーン**の求愛儀式——科学者と子供が一緒の——**を知っていたが、絶対に何も言わなかった。「ロリータ急行」や、ペドフィリア島（冒頭写真）で起こったことは、おそらく、エプスティーンのエリート科学者仲間には知られており、(少なくとも概要は)普通の科学者や、彼の小切を換金し、彼の実験室で働く多くの管理者にも知られていた。

囁かれるだけの疑惑

囁かれる疑惑が間違いなくあった。明らかな疑惑だった。実験室や廊下や休憩室に、毎日囁かれているものがあつたに相違ない。「なぜドクター誰それは、この男と一緒に旅行するのだろうか?」「あの小さい女の子たちに、何が起きているのだと思う?」「このカネはどこからくるのだろうか?」

答えは明白だった。エプステーンの生活は、インターネットの開かれたページにあつた。何千という科学者や管理者たち——エプステーンと直接関係していない人たちや、彼が取引している子供たちでさえ——これを問い、答えを知っていた。

誰も一言もいわなかった。なぜ?

命を乞う貧民たち

数年前、私はある科学者会議で、よその大学の同僚と個人的な話をした。彼の研究は、生物学でもあまり知られていない分野だったが、彼は一級の科学者だった。彼はすぐれた調査をする人で、長老として広く尊敬されていた。彼は私に、私がインテリジェント・デザインに関係していることを知っていると言った。そして、私がやっていることを感謝していると言った。彼は私に、自分はクリスチャンだと言った。彼は、多くの科学者が、ダーウィニズムは見せかけ (charade) であることを知っていると言った。そして正直に物を言う科学者には感謝しており、自分もそうしたいと熱望しているが、できないのだと言った。彼は妻が病気だと言い、もし彼が正直に言えば、「研究費がもう貰えなくなる」と言った。少しでも公然と ID の正しさを保証したり、ダーウィニズムをまともに批判するようなことをすれば、彼は残りの一生を貧民として暮らさねばならなくなる、と言った。「私の科学者生涯は、本当のことを言った日に終わるのだ」と彼は言った。彼の妻の命は、現在受けている医療に依存しており、彼が地位を失えば、彼女の治療を続けることができなくなる、と彼は言った。彼は、本当のことが公然と言えないとは、身を切られるほどの思いだが、家族に対する責任があり、彼が職を失えば共々に苦しむことになる、と言った。

科学者、特に大学・研究所の科学者たちは、もし彼らが群れから離れるなら、職業の危機に陥るといふ弱い立場にある。彼らの生命はピア・レビュー (査読) にかかっている。悪口、村八分、嘲笑、そして憎しみさえが、例えばマイケル・ビーヒー、ジョナサン・ウェルズ、ギエルモ・ゴンザレス、ビル・デムスキー、リチャード・スターンバーグ、その他の勇気ある科学者で、ダーウィン“コンセンサス”を疑問とする清廉さと勇気をもつ科学者に、降りかかってきたのを見るがよい。

エプステーン・スキャンダルが顕著に示す通り、重要な問題についての異論は、科学者共同体では禁止されている。科学者たちは、自分たちの職を守るためには、あらゆる種類

のウソや悪徳に関与し、それを許容する。彼らは「強引にやってのける。」彼らは、ジェフリー・エプステーンはすばらしいパトロンで、彼のカネはきれいだ、ちょうど、ダーウィン進化論は「事実」だというコンセンサスに参加するように、合意に参加する。多くは——おそらくほとんどが——そう信ずるから、そうするのではない。彼らは職業的生き残りのためにそうしている。

エプステーン・スキャンダルから明らかになった深い真実は、科学者共同体が、明らかなウソと犯罪と、道徳的な恐ろしい腐敗にもかかわらず、沈黙しているということである。MIT やハーヴァードや、その他の常連研究所たち、エプステーンが大量の助成金を振りまいた者たちは、当然、エプステーンのことはよく知っていて、彼と付き合うことは非道徳で、彼のカネは多分、子供セックス取引からきたのではないかと、知っていたはずである。(彼らはマウスを使って、エプステーンが大学の学位をもたず、会計士の経験はわずかで、彼の主たる経験は、小さい女の子を金持ちに世話してやることだったらしいと、見当がついたはずである。)しかし彼らはコンセンサスに固執し、何も言わなかった。彼ら自身の科学的キャリアが先決問題だった。

クラブの中に管理されて

科学界のコンセンサスで、ジェフリー・エプステーンは偉大なパトロンだという信念が、この職業のあらゆるレベルを通じて、何千という科学者の間にあった。いかなる疑惑も——そして 20 年間、苦しみ悶える疑惑があったはずだが——クラブの内部に管理されていた。同時に、ダーウィン進化論を除いて、意味のある見方はないという科学的コンセンサスもある。これも、判明した所では、エプステーンの小切手を換金する、多くの同じ科学者によって管理されていた。過去にも今も、異論はない。

これはエプステーン・スキャンダルからの教訓である。科学者は何をしても先に、彼ら自身の生き残りに献身していて、生き残るためにはどんな違反もするだろう。彼らは職業の安全保障のためには、嘘をつき、騙し、盗むだろう。彼らは密かに、子供レイプや子供セックス取引を認めさえするだろう。科学は omerta (マフィアの沈黙の掟) によって運営されている。掟破りは無慈悲に処罰される。

科学的 (そして道徳的) 真理の尺度として、科学的 “コンセンサス” は無価値である。

(写真: リトル・ジェイムズ島、別名、ペドフィリア島。ここでジェフリー・エプステーンは、科学と科学者への彼の感謝を、実行して見せた。)